

## 「選手の成長と平和を願う」

2つの大きな不安が現在も続いている。1つはウクライナでの戦争だ。ウクライナの人口の3分の1が避難を強いられている。柔道の試合には必ず終わりがあり、引き分けもある。柔道家であるプーチン大統領には、柔道精神を思い出し、1日も早く平和的解決をして欲しいと、強く願っている。

もう1つは新型コロナである。感染の第一波を思い出してみよう。それは2020年4月頃に襲ってきた。3月10日頃までは全国で50人以下だった感染者が、3月20日から22日の3連休の後に急増し、24日には東京五輪・パラリンピックの延期が決定した。25日には小池百合子知事が不要不急の外出自粛を要請した。4月7日、政府は緊急事態宣言を出した。当時の東京都の1日当たりの感染者のピークを覚えているだろうか。4月17日の206人である。ところで、昨日の東京都の感染者は627人である。当時のピークの3倍以上であることを意識して、引き続き予防には十分な注意を払うべきである。

今回の東京都柔道選手権大会は、またしても無観客での実施となったが、今までとは違い、マスクを外しての応援もあった。

ベスト8が出そろって、4試合場に分かれての準々決勝戦の熱戦を期待した。しかしながら、残念なことにその期待は裏切られてしまった。

男子準々決勝戦、第1試合場は石山潤平選手の不戦勝、第2試合場はグリーンカラニ海斗選手の不戦勝、第3試合場は一色勇輝選手の不戦勝、第4試合場は両者棄権。つまり、4試合場とも試合が行われなかった。筆者の記憶では、準々決勝戦が1つも観られないということはこれまでなかった。

決勝戦は、一色勇輝選手が右組、グリーンカラニ海斗選手が左組の喧嘩四つで、しっかり組み合うが技が出ず、1分30秒に両者に指導、3分にグリーンカラニ海斗選手に指導。残り30秒に一色勇輝選手が有効を取って優勝した。両者の健闘は賞賛に値するものだった。

女子準々決勝戦も、2試合が不戦勝、1試合が両者棄権で、1試合しか行われなかった。

決勝戦は児玉ひかる選手と杉村美寿希選手という東海大学の同門対決となった。残り30秒、児玉ひかる選手が内股で技有を取って優勝。体格差のある両者の試合は見応えがあった。

今までになく多数の棄権が出たことの原因について明らかにすることが必要だろう。

本大会のパンフレットの表紙には以下のように書かれている。

令和5年 東京都柔道選手権大会（兼、令和5年全日本柔道選手権大会予選会）

令和5年 東京都女子柔道選手権大会（兼、令和5年全日本女子柔道選手権大会予選会）

東京都のチャンピオンを決めることがメインタイトルであり、予選会はサブタイトルである。この意味を改めて認識する必要がある。

WBCをテレビ観戦している人も多いと思う。選手達の伸び伸びとしたプレーには感動させられる。柔道選手達にも、柔道を楽しみながら、伸び伸びと成長して欲しい。

そのためには、指導者の姿勢が問われる。暴言等の不適切な指導や威圧的な指導は、けっしてあってはならない。2019年以降、全日本柔道連盟への相談件数は217件、調査に乗り出したのは119件あった。選手達との接し方に配慮しながら、彼らの成長と活躍を願うとともに、ウクライナ情勢の平和的解決と新型コロナの1日も早い感染収束を強く願う。

（広報副委員長 大坪宏至）